



蘇氏一統

八遠13  
2211  
1



18  
22/1

改

子冬

丑冬

寅

辰

巳

申

酉

戌

亥

本中之所  
右大  
左小  
五層  
三郎

源氏一統志叙

本庄

天下國家之興亡者有其善與不善以古為規矩為準繩取其可捨其不可者何不至於參平之治哉一日書肆山岡友貞者袖來於盛長日記而曰雖吾藏此書積年惜哉朽于箱中而永湮滅乎願者欲其

是正之壽梓。余反覆之數月錄倉  
右幕下一世之事跡如指掌可謂  
至矣盡矣於是艾其繁禰其缺以  
成十有七卷命曰源氏一統志者  
爾正德二年龍集壬辰季春上旬  
柳隱子馬場玄隆信意



源氏一統志卷之第一

目錄

白幡丸殿誕生

竝 射小鳥 同 大江維光被為軍師事

源氏没落

附 頼朝隱絡雪中 同 在典廐橫死

原小次郎由緒

附 兵衛佐殿於所々被遇危難事

頼朝配流 附 建部官被通夜事

九郎義經武勇

並 信夫小太夫元治事

頼朝出奔伊東館

並 廷尉兼隆嫁娶事

兵衛佐殿計略事

最勝王隱謀露頭

並 三善康情豆州下向事

頼朝秘計 附 軍勢催促事

236  
74  
2069  
2899

源氏一統志卷之第一

洛下後学

馬場玄隆信意輯録



白幡丸殿誕生 弁射小鳥 同 大江維光被為軍師事

義徳ニ勝トキハ栄ヘ。徳義ニ勝トキハ亡ブ。是古今

不易ノ論ニシテ。又人ノ嗜ムコト能ハザル処ナ

リ。君子モ不義而富且貴於我如浮雲ト宣ヘリ。初コ

ソ平氏ノ栄花ハ。保元ノ春ノ林ニ開ケ。三公ノ上ニ

居テ。一族九卿ニ列レ。雲上ニ立マレハリ。絲竹管弦

ノ遊宴ニ日ヲ送り。月ニメテ花ヲ愛シテ。春秋ヲ經

ルコト僅ニ二十余年横シマニ。權威ヲ振ヒ。帝位ニ

ダニ怖レズシテ。王孫ヲ若シメ。震襟ヲ惱シ奉リ。月

明治四十二年育世堂  
本校出版部代贈

卿雲客ヲ芥ノコトクニ見侮リ冠雉ノ如クニ戒メ  
罪ナキニ諸士ヲ罰シ。万民ヲムサボリセタケ。悪行  
月ニ超過シテ。天皇ヲ罰シ玉フガコヘニ。終ニ源頼  
朝卿ノタメニ攻亡ホサレ。汚名ヲ万世ニ傳ヘタリ。  
右大将源頼朝卿ハ。神武不測ノ良將ニシテ。仁義ノ  
兵ヲ起シ。一度石橋山ニ旗ヲ奉ラレシヨリ。諸国ノ  
士風ニ飯スル。夏水ノ下レルニ就ガゴトク。風ニ草  
ノ偃スガコトシ。平家ノ逆徒ヲ尽ク誅伐シ。四海ヲ  
平定シテ。始メテ日本六十余州ノ。總追捕使ニ補セ  
ラレ。源家一統ノ基イヲ開キ玉フ。天ノ供福掲焉々  
リ。抑右大将家ノ世系ヲ尋ルニ。誰カ是ヲ知ラスト

セシ。正シク清和帝十代ノ裔孫ナリ。此帝ノ御孫六  
孫王經基始メテ源ノ姓ヲ賜ハル。其子鎮守府將軍  
滿仲其子征夷大将軍頼信。其嫡伊豫守頼義其家嫡  
鎮守府將軍陸奥守義家世ニ所謂八幡太郎是ナリ。  
其子六條延尉為義為義ノ嫡從四位下行左馬頭兼  
攝磨守義朝ノ三男ナリ。義朝ニ男子九人アリ。嫡子  
悪源太義平次男中官太夫進朝長。三男ハ右大将家  
四男ハ土佐冠者希義五男攝冠者範頼六男安野悪  
禪師全成七男横川卿公義圓八男九郎義經九男ヲ  
義榮ト号ス。女子三人アリ。一人ハ平治ニ。義朝京都  
没落ノトキ害セララル。一人ハ攪州清基ノ長カ女。延

壽カ腹ニテ夜叉御前ト号レケルガ。是モ平治ニ入  
水シテ昇世シヌ。一入ハ中納言藤原能保卿ノ北ノ  
方是ナリ。中ニモ三男右兵衛權佐頼朝ハ人皇七十  
六代近衛院御宇久安三年丁卯正月元日卯ノ尅ニ  
誕生シ玉フ。御母ハ熱田ノ大官司散位藤原季範カ  
女ナリ。此人日本ノ武將ニ備ハリ玉フベキ瑞相ニ  
ヤ。誕生ノ時尅虚空ヨリ白旗一流レ産屋ノ上ニ舞  
下リ。暫テク翩翩スルトゾ見ヘシ。風ニ漂ヒ吹レテ  
元ノ自雲トゾナリニケル。父義朝奇異ノ思ヒヲナ  
シ。此子成人ノ後必武家ノ棟梁トナルベシ。是氏神  
ハ幡大菩薩ノ御示現ナリトテ。稚名ヲ白幡丸ト号

シ。山内ノ首藤刑部丞俊道カ妻ヲ乳母ニ付ラレ。寵  
愛他ニ異ナリ去レハ係ル佳瑞ニヨツテ。義朝モ源  
家ノ嫡子ニ傳ヘ来リタル。髪切以下ノ重寶多クハ  
此人ニゾ譲リ與ヘラレケル。然ルニ白幡御曹司七  
歳ノトキ。仁平三年三月下旬父祖判官為義ノ六條  
堀川ノ亭宅ナル八重櫻ノ盛リ成ヲ見ニ糸リ玉ヒ。産  
山ニ遊ヒ居玉ヒケルニ。櫛ノ木ノ大ナルガ。生ヒ茂  
リタル陰四五段ガ程芝ノ青ミタルニ。雲雀ノ多ク  
下リ居シヲ。御曹司小キ弓ニ小キ矢ヲ手ハサミ。規  
ヒ寄リ玉ヒテ。暫シカ程ニ三羽マテ射取り玉フ。祖  
父ノ判官殿是ヲ見玉ヒ。汝ハ未ダ七歳トユノ覺ユ

レ。飛鳥ヲ射落シヌル。復イカメレキ。挙動ゾヤトテ。  
大ニ感シ玉ヘバ。御曹司打笑ヒ。弓馬ノ家ニ生レ候  
者ノ。人ヲ討タランニハ。高名トモ。奉レトモ申ナン。  
人トシテ鳥類ヲ殺ンハ。何ノ手柄ニテカ候ベキト  
宣ヘバ。為義弥感シ玉ヒ。汝成長ノ後ハ。先祖ハ。殿  
ノ武勇ニモ劣ルベカラズ。如何ナル鬼神ナリトモ。  
挫グニ堅カラシ。今ヨリ汝ヲ鬼武者ト呼ヘキゾト  
戯レ玉ヒケレバ。其ヨリシテ世ノ人。鬼武者殿トゾ  
呼ニケル。幼キヨリ手習ヒ学文ノ暇ハ。何トナキ戯  
レニモ。只弓馬ノ道ヲ好ミ。或トキハ竹馬ニ乗テ。弓  
矢ヲ携ヘ。笠懸箭筒馬ヲ真似シ。或トキハ童共ニ木

刀竹ノ杖ナンド持セ。闘ハセテ。扇團ナンドヲ以テ  
驅引ノ下知シ玉フ。實ニヤ。榊檀ハ二葉ヨリ香バシ  
ク。鸞鳳ハ卯ノ中ヨリ。色諸鳥ニ勝ルトハ。加様ノコ  
トヲヤ申スベキ。爰ニ大江匡房ノ後胤ニ。左兵衛督  
大江維光ト云フ人アリ。古維光ノ先祖中納言大江  
維時トテ。和漢ノ才人アリケルカ。渡唐シテ異國ヨ  
リ。軍略兵傳ノ奥儀ヲ授リ。日本ニ皈朝セシヨリ。大  
江ノ末孫代々。是ヲ傳ヘタリ。然ルニ久壽二年。白幡  
九九歳ヨリ。大江維光ヲ師トシテ。軍法ヲ学ヒ。保元二  
年十一歳ニテ。元服シ。賴朝ト号セラレ。翌年。皇后宮權少進。右近  
少監ニナサレ。平治元年十二月。右兵衛權佐ニ任セラレ。去ハ。賴朝

天下統一後、鎌倉ノ老臣ニテ、權勢肩ヲ双フル人モ  
ナカリシ。大膳大夫大江廣元ト云ヒシハ、維光ノ嫡  
子ナリ。頼朝卿ト父維光トハ師弟ノ契リ深カリシ  
ユヘ、頼朝配所ニ御坐シケル間モ、廣元親切ノ志シ  
ヲ運バレケルトカヤ。

源氏没落附 頼朝隱絡雪中 同 左典廐横死事

然ルニ保元年中、義朝ノ父為義ヲ始メ、四男左衛門、  
尉頼賢、五男掃部助頼仲、六男六郎為宗、七男七郎為  
成、八男八郎為朝、九男九郎為仲等、崇徳院院號ノ御  
謀叛ニ與シ、悉ク死罪ニ行ハレシ後ハ、多クノ一門  
亡ビ、果テ義朝ノ威勢ハ何トナクナリ。平家ハ日ヲ

逐テ繁昌ス。義朝イツシカ後悔シ。平氏ノ權勢ヲ妬  
ミ、憤リ如何ニモシテ平清盛ヲ攻亡ホシ。威ヲ天下  
ニ振ハシヤト思フ心付テ、悪右衛門督藤原信頼ト  
心ヲ合セ、隱謀ヲ企テ、万乘ノ君ヲ黒戸ニ押籠メ、玉  
躰ヲ辱レメ奉ル。去レバ朝敵不義ノ行跡、天何ソ見  
ヲ許シ玉フベキ。平家ト雄雄ヲ爭ソハレケルガ待  
賢門ノ一戦ニ利ヲ失ヒ、東ノ方ニ落ラレケルカ、矢  
衛、佐頼朝ハ、今年僅十三歳。未ダ幼少ノ変ナレバ、心  
ハ猛シト云ヘドモ、終日ノ軍ニ疲レ玉ヒ、覺ヘズモ  
馬嘔リシテ、江州野路ノ邊ヨリ打後レ玉フ。良誓ク  
アツテ打驚キ玉ヒ、目ヲスルく四方ヲ見廻ハシ玉



ヘドモ。前後ニ人一人モナレ。比ハ平治元年十二月  
二十七日。夜モ深更ニ及ンテ。物ノ善悪モ見ヘ分ス。  
東西ヲモ辨ヘ子バコハ如何セント。思ヒ煩ヒ玉ヒ  
ナカラ。馬ニ任セテ落玉フ。時ニ森山ノ郷民共。落人  
ヲ討留ント。群リ立テ采リケルガ。佐殿ヲ見付ケ生  
捕ント。馬ノ前後ヲ取り廻ス。今ハ遁レヌ処ゾト。鬚  
切ヲ以テ二人マテ切り放チ。續イテ進ム勇カ。左ノ  
腕ヲ切り落サルレバ。郷民等怖レテ揆ト逃退ク。其  
間ニ馬ヲ馳テ。野洲河原ニ打出玉フ。係ル処ヘ鎌田  
兵衛尉政清。佐殿ヲ尋子来リケルカ。河原ニテ尋子  
逢ヒ。大ニ悦ビ打連テ急ギケル程ニ。頓テ義朝ニ追

著泰ラスル。斯テ鏡ノ宿ヲモ過ギ。不破ノ小関ニカ  
リ。小野ヨリ海道ヲ右ニナレテ落玉フ。折節嵐烈  
シク雪深く降り積リシカバ。中々馬ニテハ叶ハジ  
トテ。皆々鎧ヲ脱捨歩立ニナツテ落ラル。然ル処  
ヘ近郷ノ野伏共。落人ヲ討留ント。喚キ叫ンテ追カ  
クル。皆人馬ハ乗捨ツ。鎧ハ著ズ。戦フトモ叶フマジ  
ト。足ニ任セテ敗走ス。佐殿ハ元來若年ナレバ。身ハ  
疲レニ疲レ玉ヒツ。味方ニハ後レヌ。敵ハ近著ヌ。如  
何ントモスベキ様ナカリシガ。若ヤ遁レテ見バヤ  
ト思召シ。道ノ傍ナル藪ノ中へ逃入テ。雪ヲ穿テテ  
其中ニ入り。頭ニ雪ヲ戴キテ。深く隠レ忍ビ玉フ。野

伏共ハ斯トモ知ラズ。逃ルヲ追テ馳行程ニ頼朝ハ  
少シ生タル心地出来ツテ。其夜ハ藪中ニテ明シ玉  
ヒケリ。去程ニ義朝ハ養濃ノ国青墓ノ宿大炊方許  
ニ著玉ヒケルガ。源氏ノ大将タル身ノ。子共ヲ引具  
レ下所ニ落ンコト。謀ノ足ラザルニ似タリ。嫡子源  
源太義平ハ東山道ノ勢ヲ催シ攻登レトテ。飛彈ノ  
方へ落シ遣ハサレ。次男太夫進朝長ハ。甲斐信濃ノ  
源氏逸見武田以下ヲ相語ラヒ。急キ攻登レヨ。吾ハ  
海道ヨリ攻上ルベシトテ。朝長ヲ信州へゾ落シ下  
サレケル去レ共朝長ハ。先日京都没落ノトキ。龍華  
越ニテ負レタル矢疵痛ミ出。叶フベクモアラサレ

バ頼朝テ青墓ニ皈リ。父義朝ニ斯ト告ケ。今ハ進退心  
ニ任セス候へバ。争カ此度ノ危難ヲ遁レ候へキ。只  
々自害仕リ候ハントアリシカバ。父義朝ハ。頼朝ヲ  
失ヒツルダニアルニ太夫進ヲモ失ハンコトヨト。  
世ニ悲シク思ヒ玉ヒシカトモ。中々敵ノ手ニカケ  
ンヨリハトテ。手ヅカラ是ヲ害シ。其ヨリ青墓ヲ出  
テ。同キ二十九日。尾州智多郡野間ノ内海長田庄司  
忠致ガ許ニ落著玉フ。長田ハ源家譜代ノ士ト云ヒ  
殊ニ義朝ノ敗散ト頼マレタル。鎌田兵衛尉政清カ  
舅ナレバ。義朝ヲ始メ。皆々路次スガウ。危キ害ヲ免  
レ。殆メテ安キ心ヲシ玉ヒケル処ニ。忠致父子忽心

変リシ。程ナク明レバ。平治二年正月三日。義朝ヲ方  
便リテ浴室ニテ殺シ奉ラセ。同夕。掣ノ鎌田兵衛尉  
ヲモ誅シケリ。

原小次郎 由緒

附 兵衛佐殿於所々 被遇危難事

去程ニ右兵衛權佐頼朝ハ去ヌル十二月二十八日  
ノ夜。父義朝ニ後レ奉ラセテ。雪中ニ身ヲ隠シ夜ト  
共ニ泣明シ玉ヒケレハ。偏身寒ヘテ氷ノゴトク。手  
足ニ覺ヘナフシテ。命ノアルヘシトモ思シ召ガリ  
シカトモ。夜明ケシカバ。兎角シテ片山隱ノ方ヘ立  
忍ヒ玉フ。時ニ年ノ程四十余リナル里人ノ。篋笠ヲ  
被キ酒樽干魚ナンド荷ヒタルガ。佐殿ヲ見テ近付

ヨリ。源氏方ノ落人トコソ見奉ラセ候ヘ。痛ハシ  
ノ御有様ヤ。我等ガ方ヘ御入アツテ。飢ヲモ休メラ  
レ候ヘトテ。二町計リ相具シテ行ト思ヘハ怪シゲ  
ナル藁屋ノ内ニ連レ至レリ。佐殿モ渠ガ偽リナラ  
ヌ氣色ヲ見玉ヒ。我今霄雪中ニ伏テ。飢寒ノ苦シ  
甚ダシ。早く焼火シテ夕ベテシヤト宣ヘバ。彼男泪  
ヲ流シ。春ノ近クナリ候ヘバ。年ノイトナミヲセシ  
タメニ。小野ノ宿ヘ酒肴求メニ奉リシナリ。歳末ノ  
計會ニ心ノイソガハンク候ヘトモ。事カ悞ナク見  
捨奉ラスベキトテ。夫婦燧火シテ。佐殿ヲアテ奉ラ  
セ。稗ノ飯ヲ盛テ饗應シケリ。元月ハ爰ニテ御送り

後へカシト強チニトバメ衆ラセシカバ此所ニ深ク忍ビテ御坐シケルガ。肌ノ守リ袋ヨリ。緋地金泥ノ心經キキリ下巻取り出し。此間ノ思ヲ報センタメ御座ニ皇ヲ與フルナリ。必ス他人ニ見セラル。ナ。深クシテ身ヲ離サルト復アルベカラズ。後衆ヲ極メ繁昌セラルベキ莫何疑ヒノアランヤトテ。高主ニ皇ヲ與へ。正月二日ノ晴天何国トモナク出玉フ。其後二十余年ノ歳霜ヲ經テ。佐殿平家ヲ亡ホシ日本ノ武将トナリ玉ヒシカトモ。彼農夫ハ。此時ノ少人ナリトモ知ラザリケリ。理リナルカナ。佐殿此トキ燕ト名ヲ名乗リ玉ハズ。アラ又作名ヲ名乗置玉へ

バナリ。去レバ天下下統ノ後。彼心經ヲ所持セシ者ヤアルト濃州ノ申ヲ尋子サセラレ。彼男ヲ召出サレ。其トキノ夜共其志シテ感シ仰ラレ。遠江ニテテ所懸命ノ地ヲ賜ハリ。原小次郎トゾ召レケル斯テ頼朝ハ青墓ヲ志シテ落玉ヒケルガ。人目ヲ忍ブ旅ナレバ。道モナキ山路ヲ分ケ。或ハ岨ヲ傳ヒ。谷ニ下リテ歩ミ玉ヒケル程ニ。アラヌ方ニ迷ヒテ。江州小比良ト云フ処ノ。山寺ノ際ニ迷ヒ出玉フ。其ヨリ五六町モ歩ミ行玉へバ。高キ山ノ麓ニ草庵アリ。殊勝ニモ住ナレケル者カ。立寄テ飢ヲモ助ケバヤト思召番ノ内ニ指入テ。旅ノ者ニテ候カ。大雪ニ道ヲ

矢ヒ、爰マテ迷ヒ来リ候所ハクハ、飢ヲ助ケテ夕ベ  
カシト宣ヘバ、六十有<sub>レ</sub>余ト見ヘタル老<sub>シ</sub>法師立出テ。  
佐殿ノ有<sub>レ</sub>様ヲ、暫シガ程熟々ト打詠メ、痛ハシノ少  
人ヤ、此方ヘ入リ玉ヘトテ、奥ニ誘ヒ、火ヲ燒キ。  
食事ナント進メテ、他事ナク饗應シケルガ程ナク  
日モ暮ヌ。法師打<sub>レ</sub>泪グミテ、正シク源氏ノ落人トコ  
ソ見衆ラスレ。如何ナル人ノ君達ゾヤ。法師ノ身ナ  
リ、何かハツ、ミ玉フベキ。有<sub>レ</sub>マ、ニ御名ヲ名乗  
リ玉ヘト云フ。佐殿聞シ召レ。御房ノ志シノ深<sub>ク</sub>ナ  
レバ、今ハ何ヲカツ、ムベキ。某ハ左馬頭義朝ガ三  
男、兵衛、佐頼朝ナリ。武運<sub>ニ</sub>尽テ、今係ル落人トナリ候

ソヤ若<sub>シ</sub>敵ノ手ニカ、リ討レヌト聞玉ハバ、後世ヲ  
吊<sub>フ</sub>テタロ玉ヘ。赤来ヲ頼ミ申サシメ、隠サス名  
乗リ候ナリト宣ヘバ、扱<sub>コ</sub>ソ止事ナキ人ト見衆ラ  
セシガ、少シモ違ハガリケリトテ、詔ニイタハリ奏  
ラセテ後、是ヨリ程近キ所ニ人里ノ候ガ、其ヘ所用  
ノ夏候ヒテ、只今参リ候ナリ。暫クノ間ハ御徒然ニ  
御坐シ、少シ御マド口<sub>ニ</sub>坐セトテ出行キケリ。佐殿  
ハ持佛ノ前ニ坐シ、燈明ヲ細クカ、ケ、経ヲ讀誦シ  
御坐ス程モ、父上ハ如何ナリ玉ヒツラン。兄君達ハ  
擣ニヤナリ玉ヒツルト、様々ノ物思ヒニ、御泪セキ  
敢ズ、暫クアリテ、主ノ法師里人ト覺シクテ、フツ、

カナル男ヲ一人俱ニ飯リ。アレナルコソ彼族人ヨ  
ト云へバ、彼男、佐殿ノ傍近クヨリ、御邊ハ兵衛、佐殿  
ニテ候カヤ。此所ヲ遁レ奉ラスルトモ、終ニハ敵ニ  
掬レ玉フベシ。逆モ遁レ又身ナレバ、我々生捕リ奉  
ラセテ、平家ノ方ニ出シ、恩賞ニ預ラン。暫ク繩ヲカ  
ヽリ至ヘトテ、既ニ禰メントスル処ヲ、貳クモ巧ミ  
シ者共カナト。長切ヲズハト、扱キ、彼男ガ左ノ肩先  
ヨリ、アハラヲカケテ切込ルレバ、ノケニ倒レテ死  
ンダリケリ。法師、疾マズ、已爭カ遁スベキト。躍リ揚  
ソテ、後ロヨリ、腰キ付ントスルヲ、横ニ拂ヒ玉ヘバ、  
痛手ヲ負テ、百ト伏ス。佐殿、乘カ、ソテ、心元ヲ突通

シ。此所ニ暫クモ足ヲ止ムベカラズト。野魚ノ口ヲ  
遁レタル心地シテ、心中ニ八幡大菩薩ヲ念ジ、暗キ  
ヲ便リニ、逃行キ玉フ。佐殿、今年十三歳ヲソロシカ  
リシ、年動ナリ。其ヨリモ足ニ任セテ、落玉フ程ニ、同  
國、浅井北郡ニ、走至リ玉ヒ。彼方、此方ト徘徊シ玉ヒ  
ケル処ニ、年老タル土人見奉ラセ、哀レニヤ思ヒケ  
ン。巴ガ宿ニ具シ飯リ。夫、婦、誠心ヲ尽シ、濁酒ヲ進メ  
テ、余寒ヲフセギ、様々ト饗應シテ、正月、中ハ、隠シ置  
ケルガ、漸ク雪モ消シカバ、正月、晦日、此所ヲ立出テ。  
弟メノ小比良ノ邊ヲ通り玉ヒケル処ニ、谷川ニテ  
將銅ノ男見奉ラセ。止、度ナキ御方ノ落人トナリ玉

ヘルニコソ。御痛ハレヤ何國へ志シ玉フゾヤ。送り  
届ケ奉ラセシ。御名ヲ名乗リ王へト云へバ。我ハ原  
氏ノ一子ナリ。音慕マテ送リテシヤト宣フ。其御姿  
ニテハ叶ヒ候ハジト。甲斐々々シクモ女ノ姿ニ出  
立也。髪切ヲ簀ニ包ミテ。已見ヲ持テ。下人ノ舁ニ見  
セカケテ音墓ニ下リ著大炊カ許ニ送リ届ケ。鶴飼  
ハ其ヨリ飯リケリ。斯テ髪切ヲ。大炊ニ預ケ置玉ヒ  
東國ノ方へ落行玉ヒケルガ。不破ノ関ヲモ過テ。関  
原ニカ、リ玉フ処ニ。平清盛ノ舍弟尾張守頼盛ノ  
郎等亦平兵衛尉宗清。尾州ヨリ京登リスルニ行逢  
ヒ至ヒ。アハヤト驚キ。林ノ中ニ逃入り玉ヒ。邊リヲ

見廻シ玉フニ。小祠ノアリケレバ。若ヤ遁レテ見バ  
ヤト思シ石シ。扉ヲ開キテ。社壇ノ内ニ身ヲ隠シ玉  
フ。宗清が手ノ者共怪シキ小冠者遁スナト。林中ヲ  
サカシケルガ。其行衛知レガレバ。宗清下知シテ。此  
社ノ内不審ナリ。扉ヲ開キ見ヨト下知シケレバ。即  
等共。小祠ノ扉ヲ押開ク。伏殿令ハ遁レヌ処ゾト。内  
ヲ抜テ。突ツ端ヒツレ玉ヒシカドモ。大勢ナレバ  
復共也ズ。終ニ生捕リ奉ラセケリ。宗清近ヅキ寄テ  
能ク見レバ。マガフベクモナキ伏殿ナリ。宗清悦ブ  
復限リナシ。去レ共情アル男ナレバ。探クイタハリ  
奉ラセテ。願テ音墓ノ。大炊カ許ニ著テ一宿シケル

が。後園ニ新シキ墓アリシヲ怪シク思ヒ。掘ラセ見  
レバ。少人ノ死骸ナリ急キ大炊ヲ招キ寄セ。如何ナ  
ル人ノ骸ゾト問フ。大炊力ナク。左馬頭義朝ノ二男  
中官太夫進朝長ノ御墓ニテ候ト。有ノマヽニゾ語  
リケル。宗清悦ビ。扱ハ朝長ニテ坐スカトテ。彼首ヲ  
モ取り持セ。二月九日ニ入浴シテ。生捕頼朝。及ビ朝  
長ノ首ヲ。六波羅ニ指上レカバ。清盛大ニ感悦シ。佐  
殿ヲバ先宗清ニゾ預ケラレケル。其後二十余年ノ  
歳霜ヲ経テ。頼朝武家一統ノ世トナシ玉ヒシ節原  
小次郎ヲ召出サレシニ。其トキ江州ノ鶴飼ヲモ召  
出サレ。此トキノ恩賞トシテ。小比良ノ郷ヲ賜ハリ

ス。又同国北浅井ノ老人ハ。頼朝卿義共ヲ奉玉ヒシ  
最初治承四年十月中旬。一人ノ男子ヲ俱ヒ。鎌倉ニ  
推参シ。土統ニツヲ献ジ。新藤次俊長ニ就テ。愚老ハ  
江州浅井ノ民ニテ候。此土統ハ古君ニ指上ケ奉ラ  
セシ。獨酒ヲ入レタル土統ニテ候ナリト申ス。頼朝  
卿渠カ古ノ忠志ヲ感レサセ玉ヒ。殊ニ早クモ奉。上  
セシ。夏。祝着ノ至リナリトテ。三度傾ケサセ玉ヒ。此  
若者ハ汝ガ子カト宜ヘバ。サン候ト申ス。吾ニ得サ  
セヨ。召使ント宜ヒテ。止メ置玉ヒ。老人ニハ金銀糧  
々ノ引出物ヲ與ヘテ。ゾ飯サレケル。彼老人ガ子ハ。  
足立ガ養子ニ遣ハサレ。足立新三郎清恒トテ。傍近



ク名使ハレケルトゾ聞ヘシ

頼朝配流 附建部官被通夜事

去程ニ右兵衛權佐頼朝ハ終ニ平家ニ生捕レ。既ニ  
死罪ニ行ハルベカリシニ。清盛ノ継母他ノ尼公先  
ダチ失シ我子ノ家盛清盛ノ舍弟ニ。頼朝ノ面サレ  
ノ。見マガフマデニ似タリレカバ。深ク是ヲ憐ミナ  
ゲキ。右馬頭重盛清盛ノ弟。尾張守頼盛清盛ノ弟ハ他ノ禪尼母  
ニ就テ。種々云ヒ着メラレシカバ。清盛モカラナク。然  
ラハ流罪ニ行フベシトテ。同キ三月十日。伊豆ノ  
国ヘゾ流サレケル。佐殿ハ他ノ禪尼情ニヨリ。不  
思議ニ命ヲ助カリ。配所ニ赴キ玉ヘバ。頼朝源五盛

安ヲ始メ。舊功ノ者共三四人。セメテ大津マデト打  
送ル。洛中洛外ノ諸人頼朝ノ流サレ玉フヲ見ント  
テ。山科四ノ官。大津邊マテ市ヲナシケルガ。其中ニ  
或老人此人ヲ見ルニ。眼ツキコツガラ。凡人トハ見  
ヘズ。如何ナレバ伊豆ノ国ヘハ流シ遣ハシ玉フラ  
ン。西國ヘコソ流サルベケレ其ユヘハ。東八ヶ国ハ。  
源氏累代ノ領国ナリ。其ヘ係ル人ヲ流シ置ンハ。千  
里ノ野ニ。虎ヲ放ツニテゾ候ラン。行末如何ナル珍  
事カ仕出シ玉フベキ。怖シクト。打シハブキテ私語  
キケルガ。果シテ思ヒ知ラル。世トゾナリニケル。  
勢多ニハ橋モナクテ。舟ニテ向フヘ渡リ玉ヒケル

か。アレナル森ハ如何ナル所ゾト問ヒ玉フ。サン候  
建部ノ宮ト申テ。八幡宮ヲ勧誘セシ地ニテ候ト申  
ス。佐殿聞シ召レ。然ラバ今夜ハ神前ニ通夜シ。暇申  
テ下ラント宣ヘバ。弥平兵衛尉宗清。驛館ニハ著バ  
シテ。山林ニ宿シタリナンド。京都ニ聞ヘ候ハバ。甚  
夕宜シカラビト申セドモ。氏神ニ御暇申シニ。何カ  
昔シカルベキトテ。建部ノ宮ニ入り玉ヒ。終夜通夜  
シ玉フ。夜半モ過ケル比。源五盛安。佐殿ノ傍近ク参  
リ。只今不思議ノ夢想ヲ蒙リ候。其ハ八幡ニ社参仕リ  
候ヘバ。御殿ノ内ヨリ。義朝ガ弓矢ハ何方ニアルゾ  
ト問ハセ玉フ。其トキ童子二人。弓ト矢ヲ持参リ。是

ニ候ト申ス。深く納メ置ケ。頼朝ニ夕ブベキ期アリ  
ト仰ラル。其後君自キ直垂ニテ参リ玉ヒ。庭上ニ畏  
ツテ御渡リ候ヘバ。銀ノ拵敷ニ打鮑ヲ六十七八本  
程置タルヲ。御手ヅカラ。頼朝給ハレトテ。御簾ノ内  
ヨリ指出サセ玉フ。君是ヲフツクト聞シ召レ。僅一  
本討リ残りタルヲ。盛安タマハレトテ。投出シ玉ヒ  
ツルヲ。盛安賜ハリ食シヌトモ覚ヘス。懐中ストモ  
覚ヘス。夢覚テ候ナリ。然ルトキハ君再ヒ世ニ出サ  
セ玉ハンコト疑ヒナシ。六十余本ノ打鮑ヲ聞シ石  
レシハ。月本六十余州ヲ。終ニハ弁吐シ坐ントノ御  
示現ニテゾ候ラシ。相カマヘテ御出家ナシト候ベ

カラスト云ヒシカドモ。佐殿ハ人ノ他聞ヲ憚リ三  
ヒ打ウナツキ玉ヒタル計リナリ。盛安ハ某ガ老母  
重病ニ侵サレ。今ヲ限りニ相煩ヒ候カ。覺東ナク候  
ヘバトテ。翌日ハ暇ヲ乞ヒテ都ニ飯リヌ。弥平兵衛  
尉宗清モ。篠原マテ打送りテ。暇ヲ告テ飯リシカバ。  
佐殿ハイトバ。心細ゲニ見ヘ玉フ。斯テ目数経テ。伊  
豆ノ国ニ下著シ玉ヒシカバ。伊東北條守護ニ申入  
ベキ旨ヲ述テ。官人ハ都ニ飯リケリ。

九郎義経武勇并信夫小太夫元治事

茲ニ故左典麻義朝ノ妾常盤ト云ヘル女房ノ腹ニ。  
三人ノ男子アリ。兄ヲバ今若禪師全式。次ハ乙若

ヲモ法師ニナサンガ夕メ。洛北鞍馬山ニ登セテ。東  
光坊阿闍梨蓮慈ガ弟子覺自坊阿闍梨ガ弟子ニナ  
シ。名ヲ遮那王九ト改メラル。然ルニ遮那王殿幼少  
ナリト云ヘドモ。出家得道ハ身ヲ震ハシテ厭ヒ嫌  
ヒ。心中ニハ我成人セバ。如何ニモシテ男トナリ。平  
氏ノ一家ヲ攻テホシ。己父ノ讎ヲ報スベシ。吾何ゾ  
法師トナリテ。平家ノ輩ト共ニ天ヲ戴ンヤト。心中  
ニ探ク此。冥ヲ思ヒ籠メ。昼ハ終月學問ニ心ヲ尽シ。  
夜ハ終夜鞍馬ノ奥僧正谷ニ行通ヒ。兵衛ヲ誓古セ  
ラレケリ。斯テ年月ヲ経ル程ニ。遮那王殿十六歳ノ

春源三位頼政が甥諸陵助頼重及比奥州ノ金商人  
三條吉次ヲスカシテ相見セラレ。承安四年三月三  
日ノ曉夫鞍馬山ヲ忍比出。奥州ニ下ラレケルガ。路  
ニテ元服シテ。自ラ九郎源義經ト名乗リ玉フ。黃瀬  
川ニ下著シテ諸陵助頼重伊東ガ許ニ坐ス。兵衛佐  
殿ノ方へ消息ヲ以テ。此由斯ト云ヒ送ル。佐殿返事  
ニ去者候相違ヘテ不便ニセサセ玉ヘト宣ヒケル  
其ヨリ此所ニ一年計リ居玉ヒケルニ。其間ニ山賊  
強盜ヲ幾度カ誡メラル。或時義經邊リノ野ニ出テ  
狩シ玉ヒケル処ニ。其里ノ者共馬盜ヲ搦ント。群ヲ  
ナシテ騷動ス。義經何處ヤラント。立寄テ見玉ヘバ。

六尺有餘ノ大男ノ。四十余リニ見ヘテ鬼鬚ウヅ巻  
テ。仁主ヲ作り損ビタルガ如クナルガ。大ナル掠ノ  
木ヲ後口ニ當太刀ヲ振テ。死狂ヒニ狂ヒケル程ニ。  
敢テ近ヅク者ナカリケリ。九郎御曹司是ヲ見玉ヒ  
彼盜ガ脇ノ下ヘツト走り寄り玉ヒ。足ニテ右ノ臂  
ヲ蹴玉ヘバ。蹴ラレテ刀ヲカラリト落スヲ。スカサ  
ズ袴ノ腰ニ取り付キ。飛上ツテシタ、カニ打付ケ  
忽搦メ捕リ玉ヘバ。諸人感シ怖レケリ。其後諸陵助  
が宿セシ近所へ盜賊多ク入りタリケルニ。九郎御  
曹司太刀計リ取テ出合ヒ玉ヒ。盜賊六人アリケル  
ヲ。四人ハ其場ニ切り倒シ。二人ニ手負セテ我身ハ

急モナカリケリ。此、夏世ニ沙汰セバ。平家ノ聞ヘ悪  
カリナント思ヒ。頼重モモテアツカフテ、覺ヘケ  
ル。義経此、由ヲ傳ヘ聞。兵衛、佐殿ノ御坐ス。配所ニ行  
テ對面シ。某既ニ成長仕リ候ヘバ。世ノ聞ヘ如何ト  
當国他国マデ沙汰シ候ナリ身ノ夏ハ指置ヌ。御夕  
メ悪ク存シ候ヘバ。先奥州ノ方ヘモ遠ク立忍ビ。世  
ノ程ヲモ見候ハント宣ヘバ。佐殿聞シ召シ。尤アラ  
ンニハ。陸奥ニ大切ニ思ハンズル者一人アリ其ヲ  
尋子テ下リ玉ヘ。上野ノ国ノ住人。大窪太郎ガ女十  
三ノ歳。父ノ太郎相具シテ。熊野ヘ参リシトキ。父義  
朝ノ見参ニ入レテ。此、以後男子出来リ候トモ。此、女

ヲ嫡子ニシタテ候ベシ。御覽シ知ラセ玉ヘト云ヒ  
シガ。父ノ太郎死シテ後。此、娘人ノ妻トナルトモ。平  
家ノ士ニハ契ラジ。同じクハ奥州ノ秀衡ハ。源家譜  
代ノ士ナレバ。渠ガ妻トナルベシトテ。夜逃ニシテ  
奥ヘ下リシ程ニ。秀衡ガ家ノ子。信夫小太夫元治道  
ニテ横取リシテ二人ノ男子ト号シ。佐藤三郎嗣信  
ト号ヲ備ケタリ其ヲ尋テ行玉ヘトテ。文督テ参ラ  
セラル。義経ハ其ヨリ暇ヲ告奥ニ下リ玉ヘバ。信夫  
元治夫婦大ニ悦ビ。嫡男三郎嗣信。次男四郎忠信。二  
人ノ子ヲ参ラセテ。是ヲカシヅキ参ラセケリ其後  
九郎義経ハ。金商人三條吉次ニ尋逢ヒ。其ヨリ吉次

ニ案内サセテ。平泉ニ立越へ玉へバ。藤原秀衡忠臣  
悦道ヲ守リ種々モテナシ泰ラセシカバ。爰ニテ年  
月ヲ送り。時至ルヲソ待玉ヒケル。

頼朝出奔伊東館 並 廷尉兼隆嫁娶事

去程ニ前右兵衛推佐源頼朝ハ。配所伊豆ノ国伊東  
次郎祐親入道ガ方ニシテ。十余年ノ歳霜ヲ送り玉  
ヒケルガ。関八州ノ者共ハ。累代源家ニ属シ。思ヲ荷  
ヒ徳ヲ戴キシ輩ナレバ。其舊好ヲ忘レズト云へド  
モ。當時ハ平家息頼ノ身トナリスレバ。世ノ聞へヲ  
ハバカリテ。常ニ参リテ。寒温ヲ問ヒ参ラスル者モ  
希ナリト云へドモ。内々ハ志シラ通ジ。世ノ反覆ヲ

待者共モ多カリケリ。中ニモ安達藤九郎盛長。大庭  
平太景義。大和判官代邦道。小中太光家。野三刑部盛  
綱等ハ。忠義ノ志シ深ク。常ニ参リ仕へケリ然ルニ  
伊東入道ハ。源家累代ノ家人ナリシカドモ。當時平  
家ノ重息ヲ受テ。武威ヲ國中ニ振フ。女子四人アリ  
一人ハ相州ノ三浦介義明ガ子次郎義澄ニ嫁セリ  
次ハ同國土肥次郎實平ガ嫡孫太郎遠平ニ嫁セリ。  
其次ハ未夕夫モナクシテ。伊東ガ許ニ居タリケル  
ヲ。佐殿忍ヒテ通ヒ玉ヒケル程ニ男子一人出来リ  
玉フ。千鶴丸殿ト号シテ。寵愛浅カラズ。掌中ノ玉ト  
モテカシ玉ヒケル処ニ。若君三歳ノ春。祐親入道。京

都ヨリ飯<sup>イ</sup>因<sup>キ</sup>シテ。此<sup>レ</sup>度<sup>ヲ</sup>傳<sup>ヘ</sup>聞<sup>ク</sup>。大<sup>ニ</sup>怒<sup>ツ</sup>テ。彼<sup>レ</sup>若<sup>ク</sup>君<sup>ナ</sup>ラ。松<sup>川</sup>ノ奥<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>滝<sup>ノ</sup>底<sup>ヘ</sup>。フ<sup>レ</sup>シ<sup>フ</sup>ケ<sup>ニ</sup>セ<sup>サ</sup>セ。彼<sup>レ</sup>女<sup>ヲ</sup>呼<sup>ビ</sup>取<sup>テ</sup>。同<sup>國</sup>江<sup>間</sup>カ妻<sup>サ</sup>ゲ<sup>ト</sup>ナ<sup>シ</sup>。剩<sup>ヘ</sup>佐<sup>殿</sup>ヲモ害<sup>セ</sup>セ<sup>シ</sup>ト相<sup>巧</sup>ム。入<sup>道</sup>ガ子<sup>。九</sup>即<sup>祐</sup>清<sup>ハ</sup>。父<sup>ニ</sup>ハ似<sup>モ</sup>似<sup>ズ</sup>。重<sup>代</sup>ノ厚<sup>恩</sup>ヲ忘<sup>レ</sup>ズ<sup>シ</sup>テ。佐<sup>殿</sup>ニ斯<sup>ク</sup>ト告<sup>急</sup>キ恐<sup>ヒ</sup>ヤカ<sup>ニ</sup>。落<sup>サ</sup>セ<sup>玉</sup>ヘ<sup>ト</sup>諫<sup>メ</sup>シ<sup>カ</sup>バ。頼<sup>朝</sup>鬱<sup>憤</sup>骨<sup>髓</sup>ニ徹<sup>リ</sup>。胸<sup>中</sup>劈<sup>ク</sup>ガゴ<sup>ト</sup>シ<sup>ト</sup>云<sup>ヘ</sup>トモ。太<sup>望</sup>アル身<sup>ナ</sup>レ<sup>バ</sup>。怒<sup>リ</sup>ヲ押<sup>ヘ</sup>玉<sup>ヒ</sup>。若<sup>モ</sup>入<sup>道</sup>寄<sup>来</sup>ル身<sup>モ</sup>アル<sup>ベ</sup>ケ<sup>レ</sup>バトテ。藤<sup>九</sup>即<sup>盛</sup>長<sup>野</sup>三<sup>刑</sup>部<sup>丞</sup>盛<sup>綱</sup>ヲ殘<sup>シ</sup>置<sup>玉</sup>ヒ。大<sup>鹿</sup>毛<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>馬<sup>ニ</sup>乘<sup>リ</sup>。鬼<sup>武</sup>ト云<sup>フ</sup>舍<sup>人</sup>一人<sup>ヲ</sup>召<sup>具</sup>セラ<sup>レ</sup>。深<sup>更</sup>ニ及<sup>ン</sup>テ遁<sup>シ</sup>出<sup>玉</sup>フ入<sup>道</sup>ハ身<sup>ヲ</sup>

夢<sup>ニ</sup>モ知<sup>ラ</sup>ガ<sup>リ</sup>ケ<sup>ル</sup>ユ<sup>ヘ</sup>。寄<sup>来</sup>ル敵<sup>モ</sup>ナ<sup>カ</sup>リ<sup>シ</sup>カ<sup>バ</sup>。盛<sup>長</sup>盛<sup>綱</sup>モ。翌<sup>朝</sup>ニ及<sup>ン</sup>テ出<sup>去</sup>リ<sup>ケ</sup>リ。斯<sup>テ</sup>頼<sup>朝</sup>ハ。同<sup>國</sup>蛭<sup>兒</sup>嶋<sup>ニ</sup>至<sup>リ</sup>。北<sup>條</sup>四<sup>郎</sup>時<sup>政</sup>ヲ頼<sup>ミ</sup>玉<sup>ヘ</sup>バ。時<sup>政</sup>累<sup>代</sup>ノ重<sup>恩</sup>ヲ忘<sup>レ</sup>ズ<sup>シ</sup>テ。他<sup>事</sup>ナクモテナ<sup>シ</sup>。泰<sup>ラ</sup>セ<sup>ケ</sup>レ<sup>バ</sup>。北<sup>條</sup>ガ館<sup>ニ</sup>テ年<sup>月</sup>ヲ送<sup>リ</sup>玉<sup>ヒ</sup>。如<sup>何</sup>ニモシ<sup>テ</sup>。奢<sup>ル</sup>平<sup>氏</sup>ヲ攻<sup>ム</sup>ボ<sup>シ</sup>。亡<sup>父</sup>ノ讎<sup>ヲ</sup>報<sup>セ</sup>ン<sup>ト</sup>。時<sup>至</sup>ルヲ待<sup>居</sup>玉<sup>ヒ</sup>ケ<sup>ル</sup>ガ。時<sup>政</sup>ニモ娘<sup>アリ</sup>ト聞<sup>ク</sup>玉<sup>ヒ</sup>。吾<sup>術</sup>ヲ以<sup>テ</sup>押<sup>テ</sup>渠<sup>ガ</sup>鞞<sup>ト</sup>ナ<sup>リ</sup>ナ<sup>ハ</sup>。時<sup>政</sup>ハ勇<sup>ク</sup>々<sup>シ</sup>キ方<sup>人</sup>ニテゾア<sup>ラ</sup>ン。智<sup>勇</sup>アツ<sup>テ</sup>仁<sup>義</sup>ヲ守<sup>ル</sup>勇<sup>ナ</sup>リ。殊<sup>ニ</sup>ハ當<sup>家</sup>譜<sup>代</sup>ノ士<sup>ナ</sup>レ<sup>バ</sup>。ヨモ疎<sup>意</sup>ハ存<sup>ス</sup>マ<sup>ジ</sup>。先<sup>ノ</sup>伊<sup>東</sup>ニハ似<sup>ル</sup>ベ<sup>カ</sup>ラ<sup>ズ</sup>。吾<sup>等</sup>一<sup>孤</sup>ノ

微カヲ以テ。日本ニ跨リタル。平家ノ一族ヲ亡スベ  
キトテ。又忍ビテ。玉章ノ千束ヲ重子。様々云ヒ寄リ  
玉ヒテ。ワリナク睦ビ玉ヒケリ。係ル処ニ北條四郎  
時政。京都ノ太番果テ。同国山木判官兼隆ト同道シ  
テ。本国ニ飯リケルガ。兼隆ヲ尊ニセント。路ニテ架  
約セシカバ。豆州ニ下著シ。此度ヲ世聞テ。大ニ驚キ  
思ヒケル。吾先祖上野介直方。相州鎌倉ニ任セシ  
ニ。佐殿ノ先祖伊豫守頼義。相模守ニナリテ。関東ニ  
下向ノトキ。直方。頼義ヲ婿ニ取り奉ラセ。八幡殿以  
下ノ子孫多ク出来リ玉ヒユヘ。當家モ今ニ繁栄  
ス。然レバ世ニダニ知ラセズ。公行未頼マアリトハ

思ヘドモ。平家ノ一族山木ノ兼隆ヲ婿ニセント約  
シヌレバ。今更如何ハセン。若詞ヲ變ジナバ。流人頼  
朝ヲ尊ニ取りタリト。平家ニ誦ヘンハ。治定ナリ。其  
時ハ如何ナル大事カ出来ント思案シテ。先息女政  
子ノ方ヲ近ツケ。御邊ハ佐殿ニ棧カラズ思ハレ奉  
ラセシト聞シナリ。佐殿ハ累代ノ主君ナレバ。身ニ  
取テノ面目何復カ是ニシカン。然レドモ流人ノ御  
身ナレバ。世ノ聞ヘヲ思フ上ニ。係ル更トハ知ラズ  
シテ。平相因ノ門葉山木判官兼隆ヲ。尊ニセント契  
約セリ。我今約ヲ變ジナバ。兼隆保ク憤リ。平家ニ誦  
シテ。如何ナル珍事カ出来ン。家ノ滅亡此トキナリ。



然ラバ御身如何ニ思フトモ。佐殿ト妹背ノカタラ  
ヒヲ。ナシ叅ラスル。復モ叶フマヅ。去ニヨツテ我深  
キ思慮アレバ。此上ハ一先御身ヲ。山木ガ方ニ送ル  
ベシ。其上ニテ佐殿ト契リヲ籠ンコトハ。御邊ガ心  
ニアルベシト申サル。息女政子ハ。兼目貌ノ世ニ  
勝レタルノミニアラス。聰明敵智双ビナシ。理リナ  
ルカナ。女性ノ身トシテ。頼朝薨去ノ後。御子頼家。實  
朝二代ノ後見ヲシ玉ヒ。天下ノ政事ヲ聞玉ヒ。尼將  
軍トヨバレ玉ヒシ程ノ人ナレバ。早ク父ノ心中ヲ  
察シ。御心安ク思召レ候ヘト領掌アル。時政大ニ悅  
ビ。頓テ吉日良辰ヲ撰ク。政子ノ方ヲ。山木ガ館ニ送

リテ。誓礼ヲゾ執リ行ハレケル。去レドモ政子ハ父  
ノ詞ノ底ヲ察シ。遁レ出ヨトノ夏ナルベシト。一夜  
ヲダニ明サレズ。其夜ノ中ニ逃出テ。乳母ノ女房一  
人計リヲ相具シテ。ソコトモ知ラヌ道芝ノ露ニシ  
ホレ泪ニヌレ。アラヌ山路ヲ分ケ迷ヒ。漸々トシテ  
伊豆ノ御山ニ入り玉ヒ。法音ト云ヘル尼ノ。年比讀  
經ノ師ニテアリケレバ。件ノ禪尼ガ方ニ入り玉ヒ。  
恐ビヤカニ佐殿ノ御許ニ。文ヲ送リテ。斯ト告知ラ  
セ玉フ。佐殿大ニ悅ビ。急ギ伊豆ノ山ニ馳登リ玉フ。  
山木判官兼隆ハ。政子ノ方ヲ失ヒテ。大ニ驚キ怒リ  
ケルガ。素ヨリ當國ノ目代ナレバ。即等共ヲ方々ニ

分遣ハレ。尋子探シケレドモ。彼山ハ大衆多キ所ニ  
テ。武家ヲ武家トモセガリシカバ。左右ナク押登ソ  
テ。棄ビ取ルベキヤウモナシ。父ノ時政モ知ラス顔  
ニテ。大ニ驚キタル躰ニモテナシ。少々即等共モ出  
レ。アラヌ方ヲ尋子ラル。忠貞ノ程ゾ頼モシキ。

兵衛、佐殿計略事

去程ニ前、右兵衛、佐頼朝ハ。舅北條、四郎時政。大庭平  
太景義。藤九郎盛長ト心ヲ合セ。奢ル平家ヲ亡ボシ  
テ。年来ノ宿意ヲ達セント相議リ。武藏相摸。伊豆、  
河ノ間ニ便宜ノ味方ヲ忍ビクニ相語ラヒ玉フト  
云ヘドモ。平氏ノ威ニ怖レテ。土肥、次郎實平。工藤、

茂光。土屋、三郎宗遠。岡崎、荒四郎義實。堀、藤次親家。小  
中、太光家。義勝、房成。尋等ガ外ハ。一味スル者モナカ  
リケレバ。頼朝思慮ヲ巡ラシ玉ヒ。諸人ノ思ヒツク  
謀ナクテハ叶フマジト。藤九郎盛長。大庭平、太景義。  
兩人ヲ竊カニ召シ。父ノ讎ニハ共ニ天ヲ戴スト云  
ヘバ。片時も早ク義兵ヲ挙ゲ。年来ノ宿意ヲ達セン  
ト思ヘドモ。當時平家ノ武威。火ノ燃泉ノ漏ガコト  
クナレバ。大義ノ計略叶ヒガタシ。思フニ今ノ時ニ  
當ツテ。能一術ナクテハ。人ノ思ヒ付ヌアルベカラ  
ズ。吾當国ニ下向セシトキ。額、源五盛安ガ。吾再ビ  
家ヲ與スヘキ旨。八幡大菩薩ノ靈夢ヲ蒙リシト語

リタリ。今是ニ附テ。能謀ヲ案ジ出シタリト。忍ビヤ  
カニ語り玉フ。兩人承リ。是最上ノ御計策不測ノ謀  
ニシテ。凡智ノ及ブベキニ候ハズト。打悦ンテソ立  
ニケル。斯テ藤九郎盛長。翌自尤アラヌ。躰ニテ。兵衛  
佐殿ノ御前ニ参リ。昨夜不思議ノ夢想ヲ蒙ツテ候  
北條殿。堀殿。大庭殿。小中太殿ヤ、聞玉ヘ。君ハ足柄  
ノ櫓ノ嶽ニ腰ヲカケサセ玉ヒ。左右ノ袖ニ日月ヲ  
ヤドシ。左ノ足ニ外ノ瀆ヲ踏ミ。右ノ足ニハ鬼界嶋  
ヲ躡セ玉フ。時ニ野三刑部銀ノ折敷ニ金ノ盃ヲ居  
持出ラルレハ。義勝房成尋。金ノ甕子ヲ懐キ進ミ出  
ラレシニ。君盃ヲ取ラセ玉ヒ。二度傾ケサセ玉フト

見え。夢ハ覚候ヒキト語ル。北條ヲ始メ列座ノ輩。夢  
ノ心ハ知ラサレトモ。偏ニハ幡太菩薩ノ靈夢ニシ  
テ。君御世ニ出サセ玉フベキ。御佳瑞ナラント云フ。  
其トキ大庭平太進。出某退テ。此夢ヲ勘ヘ候ニ。君  
日本ノ武將トナリ。四海ヲ治メ玉フベシ。日ハ主上  
月ハ上皇トコソ傳ヘ候ヘ。東ハ外瀆。西ハ鬼界嶋マ  
テ。取伏仕リ候ハン。酒ハ下且醉ヲナスト云ヘトモ。  
察ニハ本心ニ取ル。酒ヲ又三寸トモ号レ候。然ルト  
キハ。君今無明ノ酒ニ酔セ玉フト云ヘトモ。遠クハ  
三年近クハ三月ノ中ニ。醉ノ御心醒テ。御本意ヲ達  
セラレントノ。靈夢ト覺ヘ候ト云ヘハ。北條ヲ始メ

一統志 二五

列座ノ人々。謀トハ思ヒモ寄ラス。扱モ不思議ノ事  
共カナ。ハ幡大菩薩ノ御靈夢斯ノコトクナレバ。源  
氏ノ世トナランコト近キニアリ。母ホタレシクトワ  
悦ビケル誰云フトシモナク。國中恐ビクニ此。復テ  
秘語キケル程ニ。其ヨリ佐殿ニ志シテ通ズル輩出  
来ルト云ヘドモ。平家ノ權威盛ナレバ。世ノ聞ヘ  
テ慎ミケルコトヘ。父子兄弟ノ間タリト云ヘドモ。至  
ニ容易ハ。是ヲ知ラセガリシトカヤ。

最勝王隱謀露頭 或三善康清豆州下向事

平治ノ逆乱ヨリ以降ハ。平家兵馬ノ推テ執テ。月々  
ニ繁榮シ。既ニ清盛從一位大政大臣ノ先途ヲ究ス。

子共一族近衛大将。大中納言。羽林相公ニ昇進シ。日  
本國中ニ平氏ノ領スル処三十七ヶ国朝政ハ一向  
清盛ノ掌握ニアリ。加之仙院ヲ惱マシ奉リ。月御雲  
客ヲ苦シメテ。解官配流悪行心ニ任セテ世ノ耳目  
ヲ驚カカセシカバ。源三位頼政入道頼圓其子。其子  
馬場伊豆守仲綱其子。是ヲ見ルニ忍ビズ。  
如何ニモシテ平氏ノ一族ヲ攻テホサント。数年心  
ヲ碎カレケルカ。一院第ニノ皇子高倉官茂仁親王  
ノ御所ニ参リ。頼リニ御謀叛ヲ勸メ参ラセラレシ  
カバ。素ヨリ茂仁親王モ。御第ノ宮舎院ニ位ヲ棄レ  
玉ヘル事ヲ慎ラセ玉ヒ。平家ヲ滅ホシ。十善ノ帝位

二登ラント思召レ。治承四年四月九日。東國ニアル  
必ノ源氏ノ輩ニ。令旨ヲナシ下サル。御使ハ故左馬  
頭義朝ノ赤房。十郎藏人行家ナリ。先一番ニ伊豆ノ  
国ニ馳下ル程ニ。同キ二十七日。北條ニ下着セシカ  
バ。兵衛佐殿大ニ悦ビ。急キ北條四郎時政ヲ召レ。俗  
シテ御身ヲ滴メ。水キヲ装ヒ男山ノ方ヲ遷拜シ玉  
ヒテ後宮ノ令旨ヲ披キ拜覽シ玉ヒ。泪ヲ押拭ハセ  
至ヒ。天運既ニ時至ツテ。係ル令旨ヲ頂戴仕ルコソ  
有難ケレ。不日ニ勢ヲ催シ攻登リ候ベシト。領事シ  
至ヒケレバ。十郎藏人行家ハ。頼朝ニ暇ヲ告ケ。其ヨ  
リ木曾冠者義仲義朝ノ舍弟ニ相觸ント。信州ニ

以テ赴カレケル。其北京都ニ散位三善康信ト云フ人  
アリ。母ハ佐殿ノ乳母ノ妹ナリレユヘ。其舊好ヲ忘  
レズレテ。数十里ノ山川ヲ凌キ。此二十余年カ間。十  
月ニ一度ワ。厚州ニ使者ヲ指下シ。洛中ノ夏共ヲ  
委細ニ是ヲ告申レケルガ。此度モ其子康清ヲ使ト  
シテ。伊豆ノ国ニ指遣ハス。同キ六月十九日。康清。北  
條ニ下着セシカバ。佐殿急キ關所ニ招キ。忍ビヤカ  
ニ對面シ玉フ。康清申ケルハ。初モ官ノ御謀叛露顯  
セシメ。三井寺ニ落サセ玉フト云ヘドモ。衆徒ノ心  
一フナラズ。其上微勢ナレバ。奈良法師ヲ頼マセ玉  
ヒ。南都ニ落サセ玉ハンガクメ。源三位入道父子一

族渡邊一黨三井ノ衆徒等御供仕リ。宇治ノ平家院  
 マテ落サセ玉ヒ候処ニ平知盛<sup>ヒモ</sup>繼盛<sup>コレ</sup>以下。二方余騎ニ  
 テ追カケ。宇治川ヲ隔テ相戦セ候時ニ足利又太郎  
 忠綱<sup>ツチノヲ</sup>真先ニ河ヲ渡シ候程ニ。平家ノ勢尽ク河ヲ越  
 シ。龍<sup>キリ</sup>ヒカ、ワテ攻立シカバ。源氏ノ勢散々ニ散ヒ  
 去月二十六日。三位入道頼圓<sup>ライエン</sup>嫡子伊豆守仲綱<sup>ナカツナ</sup>次  
 男延尉兼細足利判官代義房以下ノ人々。悉ク討死  
 アリ。宮ハ南都ノ方へ落サセ玉ヒ候処ニ光明山ノ  
 麓<sup>フモト</sup>ニテ。流矢<sup>ナカレヤ</sup>ノタメニ御落命ナサレ候ナリ。去ニヨ  
 ツテ穠盛入道<sup>シヨウセイ</sup>淨海大ニ怒リ怖<sup>オソ</sup>レ。此度官ノ令旨ヲ  
 受シ源氏ノ余類<sup>ヨク</sup>諸國ニ多クアルベケレバ。尋テ探<sup>サツ</sup>

ツテ討滅ボシ。源家ヲハ根ヲ断葉ヲ枯サント相巧  
 マレ候ナリ。然レハ君ハ故典<sup>コテン</sup>廐<sup>キヤ</sup>ノ御賢息<sup>ケニソク</sup>ニシテ。源  
 家ノ正統<sup>トウツ</sup>ニテ渡ラセ坐セハ。早速討手ヲ差向候ハ  
 シ。最<sup>モツトモ</sup>其怖畏<sup>フワイ</sup>ナキニ候ハズ。早ク奥州ノ方へ御落ナ  
 サレ候ベシ。此旨委細ニ申スベシト。康信申付候ト。  
 忍<sup>ニ</sup>ヒヤカニソ申ケル。去レドモ頼朝智勇兼備ヘタ  
 ル良将ナレハ。敢テ驚キ玉フ氣色モナク。三位入道  
 武運<sup>ブクン</sup>ワタナフシテ。一族滅亡ニ及ヒ。殊ニ宮ノ御落  
 命<sup>ナキ</sup>コソ歎入ル処ナレトテ。大和判官代<sup>ダイワノ</sup>拜道<sup>ハク</sup>ニ仰セ  
 テ。康信ガ方へノ返状ヲ書シメ玉ヒ。康清ヲソ飯  
 玉ヒケル。

頼朝秘計 附軍勢催促事

去程ニ兵衛、佐頼朝ハ。宿敵入道相因。源氏ノ一類ヲ  
悉ク追討スヘキ金ノ由。康信ガ申條ニヨフテ。早ク  
是ヲ知リ玉ヒ。大ニ驚キ寢食ヲ忘レ玉ヒ。北條以下  
一味ノ輩ト種々思慮ヲ巡ラシ玉ヒケルガ。先ンズ  
ルトキハ人ヲ制スルニ利アリ。人ニ先ンゼラル、  
トキハ人ニ制セララル、ト云ヘリ。手ヲ扶イテ討平  
ノ来ルヲ待ンヨリ。早ク勢ヲ催シ義兵ヲ率ケ。運ヲ  
天ニ任スベシト。藤九郎盛長。小中太光家ヲ以テ伊  
豆相摸ニ在任スル処ノ御家人等ヲ相カタラハル  
ト云ヘドモ。當時平家ハ武威盛ンニシテ。突ノ燃上

ルガゴトク。源氏ハ衰へ果テ。五更ニ及ベル燈ノ消  
ナントスルガゴトクナルニ。殊ニ令旨ヲナシ下サ  
レツル高倉ノ宮ハ。御落命アリ。頼政一家ハ滅亡シ  
ヌレバ。源氏ニ志シアル者共モ。皆平家ノ權威ニ怖  
レテ。催促ニ従フ者ハ希ナリケリ。其比豆州ニ文覚  
トテ甚ダ異様ノ僧アリ。其俗種ヲ尋ヌレバ。遠藤左  
近將監盛光ガ一男ニテ。上西門院ノ北面ノ下。蔭ナ  
リ。其名ヲ遠藤武者盛遠ト号シケルニ。去子細アツ  
テ。十八歳ヨリ出家得道シ。專ラ佛道修行シケルガ。  
洛北高雄ノ神護寺ヲ再興セント大願ヲ發シ。勸進  
奉加ヲナシテ。諸人ノ助成ヲ受ケル程ニ。仙院ノ御所

法任寺殿ニ推參シ。種々無礼ヲナシ。法皇ヲ様々悪  
口セシカバ。其科ニヨリテ。伊豆ノ国ニ流サレ。奈古  
屋ノ觀音寺ニ草菴ヲ結ビ居ラレケルガ。兵衛佐殿  
ノヲハスル処トハ。無下ニ程近カリレカハ。常ニ佐  
殿ノ方ニ參リ。種々ノ物語ヲシ。時々謀叛ヲ進メテ。  
哀レ思召レ立レ候ヘカシ。誰カハ源氏ニ從ハサル  
者ノ候ベキ。御本意ヲ達セラレナバ。神護寺ヲ再興  
アツテタビ候ヘナンド。日比申サレケレバ。佐殿思  
慮ヲ巡ラレ玉ヒ。此法師コソ究竟ノ方人ナレトテ。  
同キ六月二十六日。恐ヒヤカニ文覺上人ヲ招キ玉  
ヒ。吾身不肖ナリト云ヘドモ。最勝王ノ令旨ヲ賜ハ

リ。逆臣大政入道ガ一族ヲ誅伐ノ謀ヲ巡ラレ候処  
ニ。官ヲ始メ奉リ。賴政一家平氏ノタメニ滅亡セリ  
吾鬱憤ヲ散シ。多年ノ宿意ヲ達センタメ。今近國ノ  
勢ヲ相語ラフト云ヘドモ。其令旨ヲナシ下サレツ  
ル官御落命アリレユヘ。源氏譜代ノ者共ニテ。皆心  
ヲ變ジ運ヲ窺ヒ。招キニ應ズル者希ナレバ。斯テハ  
本意ヲ達シガタシ。去ニヨツテ能術ヲ案レ出シ候  
ナリ。御房ナレテタベテンヤト宣ヘバ。何コトニモ  
アレ。愚僧命ニ替ナバ。如何ナル謀ヲモナシ候ハン。  
平家謀伐ノ後。高雄再興ノ事忘レサセ玉フナト申サ  
ル。賴朝大ニ悦ビ玉ヒ。手カ忘レ候ハントテ。上人



ノ耳ニ口ヲツケ。加様々々ノ術ナリト私語キ玉フ。  
文覚打ウナツキ。其コソ最安キ夏ニ候。叔々和君ハ  
謀オヲハスル大将カナ。ア巧ンダリ巧マレタリト。  
切テツキタルヤウニ。大色アゲテ感ゼラルレバ。佐  
殿驚ロキ。ヤ、御房人モゾ知ルト制レ玉フ。其後文  
覚居直ツテ。佐殿ト額ヲ合セ。シメヤカニ密事ヲ談  
レ。奈古屋ノ寺ニゾ飯ラレケル。其ヨリ文覚ハ。俄ニ  
方丈ノ菴室ヲ掃ヘ。三方ニ壁ヲヌリ。一方ニ口ヲ開  
テ。中ニ繩床ヲ置文覚其内ニ入テ戸ヲ立。外ヨリ鎖  
ヲサ、セ。世間へハ入定スト偽リ披露シケルガ。同  
キ七月九月。出定ト沙汰セサセテ。菴室ヨリ出。佐殿

ノ御館ニ参上シ。愚僧仰ニ従ヒ。京都ニ登リ。院宣ヲ  
申賜ハツテ参ラセシメ。世上へハ入定スト偽リ。  
夜ヲ日ニ繼テ上下向八月ニシテ。都ヨリ馳飯リ候。  
平家追討ノ院宣コソ。安々ト申賜ハツテ候ヘトテ。  
院宣ヲ取出シテ渡サルレバ。佐殿急キ北條以下ノ  
輩ヲ悉ク招キ集メ。手洗嗽シ。淨衣ニ纏サシ烏帽子  
打著テ。八幡大菩薩ヲ伏拜シ玉ヒ。院宣ヲ三度押戴  
キ。披イテ是ヲ讀玉フ。其文ニ曰ク。  
早可追討清盛法師。一類事  
右君子不直人者。令民成愁。姦臣在干朝者。賢者不  
進。彼一類者。帝非忽緒。朝家失神威。與佛法既為佛

神之怨敵亦為王法之朝敵仍仰前右兵衛權佐源  
朝臣宜令追討彼輩早退怨敵奉安震襟矣依院宣  
執達如件

治承四年七月五日

散位光能奉

前右兵衛權佐殿

トゾ書レタル。佐殿暫ラク落涙アリ。官ノ令旨ト云  
ヒ。法皇ノ院宣ヲ賜ハル。夏。頼朝ガ一期ノ名譽。未代  
ノ眉目タリ。生テハ身ヲ釜中ニ煮ラレ。死シテハ  
ヲ醬ニセラル。トモ。何ゾ痛ム。夏アラン。旁モ  
ノ君ノタメニ一命ヲ拖テ。粉骨ヲ尽サレヨト宣ヘ  
ハ北條土屋土肥大庭以下。十善ノ天子ニ命ヲ奉リ。

累代ノ君ノタメニ死セン。夏。現世ノ思出。未來ノ土  
産何。夏カ是ニシカントゾ勇ミケル。佐殿大ニ悦ビ  
玉ヒ。此上ハ時日ヲ移スベキニアラズトテ。藤九郎  
盛長ニ。小中太光家ヲ相添ヘ。伊豆相摸ノ勢ヲ催ホ  
サレケレバ。佐殿コソ院宣ヲ蒙リ玉ヒツレトテ。召  
ニ應ジ領掌ノ輩多カリケリ。是院宣ヲ申し賜ハリ  
シニアラス。元來頼朝ハ子房孔明ガ再生トモ云ツ  
ベキ良將ナレバ。文覚ヲ語ラヒテ。巧ミ出シ玉ヘル  
謀ニシテ。希代不測ノ計略ナリ。官ノ令旨ヲ賜ハル  
ト云ヘドモ。程ナク宮隱レサセ玉ヒシカバ。伊豆相  
摸ノ者共モ。案ニ相違シテニ心ヲ生ジ。頼朝ノ催佐

二從ハサルニ。平家ハ頼政ノ謀叛ニ驚キ。源氏ヲ悉ク滅ボサント用意シケレバ。頼朝モ今ハ止コトヲ得玉ハス徒ラニ首ヲ述テ死ヲ待ンヨリハ。速ニ義兵ヲ擧ケ。叶ハヌマデモ打テ出。命ヲ限リニ戦ヒテ。骸ヲ戰場ニ曝シナハ。父祖ノ讎ハ報セズトモ。誓レハ後代ニ残ルベシ。若天運ニ叶ヒナバ。奢ル平家ヲ追寄レ。再ヒ家ヲ與スベシ。逆モ死スベキ身ノ。爭カ犬死ヲスベキト思慮シ玉ヒ。死ヲ一偏ニ思ヒ定メ。近日義兵ヲ擧ント催ホサレシカドモ。諸人思ヒ付ザリシカバ。今此謀ニ及ンテ。院宣ト号シテ。謀書ヲ擣ヘ玉ヒケルヲ。知人曾テナカリケリ。叔コソ後世

ニ。赤松浦祐ガ。頼朝卿ヲ諂テ武王ノ中ノ武王ナリト云ヒシモ。理リナリ。右書ニ多ク院宣ヲ賜ハリタリト記シヌルハ。其實ヲ知ラスレテ。誤リヲ末代ニ傳フルナリ。院ノ御氣色ヲ蒙リテ。流罪ニ遇レ文。覺勅許モナクテ都ニ登ルダニ。罪科道ルベカラハルニ。院宣ヲ所望仕リタリトテ。何ゾ是ヲ賜ハラン。實ニ院宣ヲ賜ハリタリト記セルハ。誤リノ甚レキ處ナリ。 **本庄**

源氏一統志卷之一終

67

